

子供たちのために、胃カメラを贈ることが出来ました！

NPO 法人日本ヨーガ療法士協会・兵庫 古市佳也

この度、キエフ市立第 9 小児病院消化器内科のザムーラ・ヴァレンティーナ医師に、念願の子供のための胃カメラを「NPO 法人復興支援ヨーガの風」より贈り届けることが出来ました。この病院は、消化器系専門病院で首都キエフ市全域から子供たちが来ます。

私が、一般社団法人日本ヨーガ療法学会から派遣されて、初めてウクライナ国キエフに赴いたのは、今から 8 年程前の 2009 年 1 月でした。ウクライナ国の医師から木村慧心理事長に、チェルノブイリ原子力発電所の事故で被災し、健康被害を受けた方々へヨーガ療法の指導に来て欲しいという要請があったからでした。しかし、この時は、現地の事情がよく分からなかったためヨーガ療法を紹介した程度でした。そのため、また来ることが出来たら、今度は皆さんのお役に立つことをしたいという気持ちでの帰国でした。しかし、日本から遠いため現実的には難しいだろうなという思いでした。

しかし、2010 年 5 月に 2 回目の訪問が実現しました。その時、自身も被災されたザムーラ先生が勤務する病院を訪問しました。院内を一通り見学させて貰いましたが、薬棚に殆ど薬品がなく、一緒に同行した長崎大学医学部教授の亀井勉医師や東邦大学付属病院の木村宏輝医師が、日本の学校の保健室よりも薬がないことに、普通では考えられないと驚かされていました。また、医療機器も旧式のを何とか使っているような状況でした。最後に胃カメラの処置室に案内されました。ガランとした暗い殺風景な部屋の壁の前に旧式の機器が 3 台、吊るされていました。

ザムーラ医師によると、1 台は壊れているとのこと。残りの 2 台もファイバースコープの先端にある器具が時々、壊れるため、医師たちが自分たちで修理をしながら使っていると言われました。また、チューブが子供用としては太く、小さな子供には大変な苦痛を伴い、稀に食道を傷つけることもあるので何とか中古でもいいから支援をして欲しいと訴えられました。同行した医師も、お互いに目を合わせて言葉を失っていました。

ところが、私立の病院には最新の医療機器があり、西側諸国と遜色のない医療を受けることが出来ますが、一般市民にとっては医療費が高額なため、行くことが出来ないそうです。旧ソビエト時代は、医療費は無料でした。しかし、1991 年にソビエト連邦が崩壊。その後、1990 年代の経済危機に見舞われて、ウクライナ国の経済は大変厳しい状況におかれています。一般市民の月収は、15,000 円位と言われています。国立病院の医師ですら給料だけで生活できない



ため、夜はタクシーの運転手のアルバイトをしてしのいでいる人もいと聞きました。また、給料の遅配のため、何ヵ月も給料がないと国立病院の医師が話していました。そうした事情のため新しい機器を購入したくても購入出来ない状況でした。そこで、私たちに何とか支援をして貰えないかということでした。

日本に帰国後、日本ヨーガ療法学会から、中古の機器を贈ることが出来ないかと様々な方面から調べられたそうですが、メーカーから中古品を出すことは難しいとのことでした。また、最新の機器の購入も検討されたそうですが、洗浄機も含めると 1,000 万円を超えるため簡単に支援ができる金額ではなく、また、通関手続きも難しいとのことでした。私たちの支援の範囲を超えているという判断になりました。

3年後の8回目に訪問した2013年3月より、この病院に入院している子供たちに対してもヨーガ療法の指導をさせていただくようになりました。ちょうど日本の小学1年生から中学3年生に当たる子供たちが参加しますが、現地の医師によると、みんな胃潰瘍だそうです。何故、小さな子供たちが胃潰瘍になるのかというと、理由は判らないと言われていましたが、ストレスが一つの原因と話されていました。しかし、何にストレスとなっているのかは話されていませんでした。被ばくの影響により2世、3世の子供たちの消化器系が弱いという人もいましたが、よく判らないというのが現状のようです。その子供たちが胃カメラの検査を受けます。

この時から、毎回、訪問する度に、最後に処置室に連れていかれて、壊れかけているので何とか支援して欲しいと言われ続けました。しかし、簡単に支援ができる金額ではなく、いつも話だけを聞いている状況でした。ある時、ザムーラ先生が言いました。「いつも、いつも、胃カメラを支援して欲しいとばかり言って申し訳ないです。こんなことを聞くのは嫌でしょ。私も毎回、毎回、皆さんにお願いすることが辛いんです。でも、国からの援助は期待できないし、予算もないし、子供たちのことを考えると、こうするしかないんです」と寂しそうな笑顔で言われました。毎回、毎回、聞いているうちに、いつの間にか、また支援の話か・・・という気持ちになっていた自分がとても恥ずかしくなり、ザムーラ先生の気持ちを思うと、いたたまれなくなりました。支援をしたいけれども支援できないというもどかしさと、それでも何とかならないものかという思いと、毎回、渡航する度に、心に重くのしかかってきました。ところが、昨年、木村慧心理事長が、「みんなで支援しよう！」と英断してくださり、2017年のユネスコの国際ヨガ Day において、日本全国で開催されるイベントにおいて「キエフ被ばく3世の子どもたちに胃カメラを送ろう」と大々的に募金活動をしていただきました。そして、沢山の方々からの温かいご支援をいただき、ついに、念願であった新品の日本製の胃カメラを寄付することが出来ました。

そして、2017年10月13日（金）に、キエフ市ポドール地区にあるザムーラ先生の勤務する病院に赴き、贈呈式を行いました。被ばく者支援団体ゼムリャキ（同郷人）からは、街の反対側にあるため、中央を流れるドニエプル川を越えて、車で30分程かかります。実は、既に、胃カメラは病院に納品され使用されていました。それは、日本から送るよりも、

現地のザムーラ先生が一番、使いやすいものを、現地の事情に合わせて自分たちで選んで貰った方がいいという判断で購入費用を支援するという形になったからでした。

病院に着くとザムーラ先生が迎えてくれました。1年ぶりの再会でしたが挨拶もそこそこに処置室に案内されました。病院の医師やスタッフが待っているのかと思ったら、部屋の中はがらんとしていて誰もいませんでした。誰も、参加しないのかなと思いつつ、新品の胃カメラを治療台の上に置いて貰って、木村理事長からのメッセージをNPO 法人日本ヨーガ療法士協会・宮城の佐藤美弥子幹事長が代読され、贈呈式を執り行いました。その後、ザムーラ先生が感謝の言葉を述べられました。驚いたことに、今回、新品の胃カメラを手にしたのは15年ぶりだったそうです。そのため、胃カメラが納品されて手にした時、あまりにも嬉しくて手が震えたそうです。この病院では、一日に10～20人位の子供たちに使用するそうで、年間3,000人ほどになるそうです。



現地でファイバースコープのチューブを見せて貰うと、7ミリの細いものではなく、9.8ミリの少し太いものでした。なぜ、細くて子供に負担のかからない7ミリのものにできなかったかというと、細いものは洗浄した時に故障しやすくメンテナンスにお金がかかるため、今後の維持費のことを考えて太いものにしたとのことでした。やはり、現地のことは現地に任せた方がいいのだなと思いました。



キエフ市立第9小児病院

キエフ市立第9小児病院入口

2010年に胃カメラの支援をお願いされてから7年が経ちました。1,000万円を越えると聞いていましたので、本当に、実現するとは思っていませんでした。しかし、折に触れて何とかならないものかという思いが浮かんできましたが、自分の中で無理にその思いを打ち消していました。しかし、木村理事長が、昨年2016年に行われた国際ヨガ Day のイベントで、日本全国で熊本の震災支援の募金活動をした時に400万円集まったため「2年経てば支援出来るぞ!」と英断されたことで動き始めました。そうすると、首都のキエフ市に日本のメーカーの代理店があることが分かったり、もう少し安いものでいけそうだとということが分かってきたり、更に、現地のザムーラ先生に一番使いやすいものを選んで貰ったら400万円位で購入できそうだと分かってきたりとして、最終的に内視鏡と鉗子を合わせて231万円で購入出来ました。不可能だと思っていたことが実現することができました。出来ないと思っていた時は、全然、動きがなく、出来るかもしれないと思い始めたら本当に実現してしまいました。不思議な感じがします。今回、英断をしてくださいました木村理事長に心から感謝いたします。また、たくさんの善意のご支援をくださいました日本全国の皆様、本当に有難う御座いました。この場を借りてお礼を申し上げます。本当に有難う御座いました。

これからも、目線を同じにして、国や政治を超えて、皆様のお役に立てる活動をしていきたいと思えます。宜しく願い申し上げます。

(ヨーガ療法通信 第15号 2018年4月20日発行より転載)